
【畜生】

楓麟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【畜生】

【コード】

N3233N

【作者名】

楓麟

【あらすじ】

おや、また一人、人間がやってきたようだ。

どうだ、ひとつ話を訊いていかないか。

ご覧の通り、俺は

(前書き)

短編は始めて投稿なので緊張しています。サツクリ読めるようなものを書きたいものです。

オヤ……この臭いは、人間だな。またどうしてこうやって寄って
たかって俺を見るのだ。人間と言うものは。

△……新顔だな、またどうして若い男がやってきたものだ。暇人
にも程がある。

お前は どうしてここに来た。

通りすがりか、それとも俺に何か用か？

……まあいい、ここはどうだろう、俺の話を読めないか。十二、
すぐに終わる。心配するな。

ン？ ハハ、そうか。心配はいらないさ。俺はお前を取って喰っ
たりはしない。ほら見る、俺はこうして手足を鎖で繋がれているし、
俺とお前の間にはこうして鉄格子がはめてあるだろう。若い人間は
美味しいが、な。

さあ、そこに座れ。話を聞け。汚いところで申し訳ない、椅子も
無いが、我慢してくれ。

俺は見ての通り、獅子だ。

百獣の王、ライオンだ。

ところがマア、今はこんな有様だよ。こんな狭いところにぶち込
まれて、喰らい薄汚い、そして不味い飯しか喰えない所に放り込ま
れ、牙と爪は削そがれ、尾は千切れ、目も悪くなれば鼻も利なくな
った。そんな有様だ。だがまだ俺の誇りと、この鬣たてがみは昔と変わらず
残っているぞ（そうして相手は自分の毛を撫でた）。

ところで俺がどうしてお前を呼び止めたかと言つと、俺の昔の話
をしたくてな。思い出だ、遠い過去だ。何故かって？ そうでない
と俺が俺であるのを忘れてしまうからさ。俺は歳を取った。だんだ
んだんだん、俺は俺が何だったのか分からなくなるときが増えてき

た。こうして自分について語っていないと、俺はいつか自分のことを忘れてしまうのではとそら恐ろしくて、だからこうして通るものがある度に話をするのさ。

俺は草原で暮らしていた。広い広い、見渡す限り草しかない、そんな土地だ。乾いた地面は燃えるように熱く、日は照らすし、上も下も大火事だったが、今思えばあそこほどいい場所はなかったと思う。

俺には家族がいた。親父は頑固者で、そして怠け者だった。こいつは俺が生まれて間もなく群れを出て行ったがな。母は立派なひとで、狩りがとても上手だったし、それを俺達に分けてくれる優しい獅子だった。妹は俺と二歳差で、父親は別の群れの獅子だ。だが俺と彼女は血が繋がっていることは変わらない、当然可愛がってやつたし相手も俺に良く甘えてきた。

俺は狩りが下手だったよ。妹に先を越されたときは悔しくて恥ずかしくて、暫く表ひたしに顔を出せなかったね。俺の長所が、短所を作ってしまったんだ。足の速さだ。そう、俺は走るのがとても速かった。それは鳥のよう、風のよう、もの凄いスピードで走るものだから、獲物を捕らえようとしても勢いアマってつんのめってしまうわけだ。これはお笑い種にされた。だが俺は気にしなかった。母がいつも慰めてくれたし、「その足はいつかきつと役に立つよ」と言ってくれた（彼は家族構成、それぞれの性格や特徴などを細かに述べてくれた）。

あれは雨季だったな、大雨の中俺は雌を見つけた。

美しい女のひとだった。俺を見据える黒い目は、太陽よりも月よりも眩しく見えた。俺は彼女の周りをぐるぐる廻まわって気を惹ひいたよ。自慢の脚力で、魅了しようとしたのだ。だがマア相手は戸惑うたがっているふうだった。不審者を見る目つきで俺を見ていた。俺はちよつと

嚇かしてやるうと前足の鍵爪でちよいと相手を引つ搔く真似をしたりして、今思えば滑稽な姿で彼女を誘惑したわけだ。癖で前につんのめって顔が泥だらけになったところで、ようやくと彼女は笑ってくれたのだがな。ふたりで子供をつくろうと、そういうわけで所謂いわゆる甘い夜を過ごしたりして、俺はとても幸せだったよ（ここから話はわき道に逸れていったので、私は自分の膝の上に置いていた書類を眺めていた）。

だがそれを引き裂く出来事があつたわけだ。人間どもの襲来だ。なぜか奴らは俺達を捕らえたがるのだ。彼らは俺を追つた。俺は走つた。自慢の足で。だがふと後ろを振り返ると、我が妻が狙われているのではないか。俺は急いで引き返し、人間どもに突進していった。お陰で彼女は助かったが、俺はひどく頭をぶたれたような気がして気を失つてしまった。目が覚めたとき、俺はここにいたわけだ。ここが一体どこだか分からないまま、一体何年のときが流れたのだろうか。妻や子供はどうしているのだろうか、俺は不安で心配で仕方が無い。向こうもそうなのだろうか。だとしたら伝えてほしいものだ。俺はもう死んだのだと。今までに何人もの人々にこの伝言を頼んでは見たのだが、果たしてそれは届いているのだろうか。

ム、うむウ……頭が痛いな……。最近は激しくなってきた。吐き気がする。目から火が出そうだ、ちかちかして何も見えない。

「ウワアアアアアアアアッ！」

目の前にいる獣けだものは頭を抑えて身を縮めた。私はそれを見ていた。ぼつぼつに伸びた髪と髭が、男の顔を覆い隠すようで、そして獅子のようであった。血走つた目、垢だらけの爪、汚れた身体……あまりに痩せ細っていて、死屍ししのようであった。私は男から目を逸らし、再び膝の上に置いていた書類を眺めた。

「男。年齢は四十五」

「痛い痛いイタイイタイ」

「母子家庭。妹とは父親が異なる」

「頼むここから、俺はナゼ」

「何らかの麻薬を服用していた恐れが」

「俺は人を殺した殺した殺したコロシタ」

「殺人、強姦、人食、他多数の罪を犯し」

「もっと、もっともっとモットモット」

「己が獅子であると思ひ込み、」

「イタイ誰か俺に助けて」

「己の罪について、過去について決して話そうとしない。時たま我に返ったように人間であることを思い出す。また、ただ獅子であるという記憶は、人間の記憶と合致しているものと思われる、か」

「頼む！」

男が吼えた。

地面に伏せ、顔だけをくいと上げて、私を見ていた。

目の焦点が合っていない。

「俺をここから出してくれ、早く早く早く！ 俺の妻はどこだ、どこにいる、なぜ引き剥がした何がいけない、どうして俺はここに」

私の方が吐き気がして、私は背を向けて足早に監獄を後にした。

周りの罪人が哀れに思えてくるほどだ。

私は一度も振り返らなかった。

「頼む、お願いだ！ こうして俺が頼んでいるんだぞ、俺の牙や爪が生えたらすぐにでも力づくでここを出てやるんだからな！ すぐにお前らなど喰ってやる、だから早く出せ、出せえエエエエエエエエエエッ　　！　　ウワアアアアアア　　ッ！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3233n/>

【畜生】

2010年10月8日14時36分発行